

序文

昨年の12月末の朝日新聞に、興味深い記事が掲載されていました。それは21世紀に入って既に10年が経過するが、この10年間の00年代を英語でどう呼ぶか、未だに決まっていなという記事でありました。ご存じのように英語では、1980年代を Eighties、90年代を Nineties と言います。では、この10年間をどう言うか。タイム誌によると Zeros、Double O's、2Ks など候補はあるもののまだ決まっていな、という記事でした。まさに、この10年を象徴するかのような内容でした。振り返れば、この10年間で私たちの周りには世界も国も大きく変わりました。同様に、大学もまた大きく変わりました。特に平成16年の法人化は、大学が自らの意思で大学のあり方や役割について真剣に考える上で、大きな役割を果たしました。そして、このことは名古屋大学工学研究科・工学部技術部においても全く同様であったと思います。

名古屋大学では法人化を機に、全学の技術支援組織を全学技術センターに一元化しました。そこには、総合基幹大学として今後も高度な専門性に裏付けされた教育研究を進めていく本学にとって、それに必要な専門技術を集積し、それらのより広い展開を図ることができる体制の整備がありました。この改編によって、工学研究科・工学部技術部も全学技術センターに統合されることとなりました。これに併せて、技術職員にも従来の教育研究支援に加え、防災・安全への対策、情報通信基盤の整備など全学的な共通業務への対応が望まれるようになってきました。本技術部もこの要請に応えるため、新体制の下に新たな技術の習得・開発にも努めてきました。そこで会得された技術は工学研究科はもちろんのこと、全学が共有すべき貴重な財産であることは言うまでもないことです。

「技報」は、この1年間の工学研究科・工学部技術部における活動を技術報告として記したものです。そこには、本技術部に所属する技術職員が日頃の教育研究支援を通じて培った技術と、研修等を通じて新たに会得した技術が取りまとめられています。このため、本冊子は単なる報告書ではなく、工学研究科をはじめ全学が継承していくべき技術の資産目録でもあります。本技術部では、今後とも全職員がそれぞれ得意とする技術にさらに磨きをかけるとともに、新たな技術の会得にも積極的に努めていく所存でおります。皆様方には本技術部の活動に忌憚のないご意見をいただくとともに、これからもその活動に対してのご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成22年3月

工学研究科・工学部技術部長
小野木 克明